

卷八

端 成 集 第 七 卷

名 人

昭和31年6月21日 印刷
昭和31年6月25日 發行

川端康成選集

第七卷

(第六回配本)

名

人

定價 二六〇圓
地方賣價 二七〇圓

著者 川端康成

發行者・東京都新宿區矢來町

七一 佐藤亮一 印刷者・東

京都千代田區神田神保町三ノ

二三 塚田重 印刷所・塚田

印刷株式會社 製本・加藤製

本所 *落丁・亂丁本はおとりかえいたしません。

發行所

株式會社 新潮社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京三四局七二一—八番
振替 東京八〇八番

目次

名	人	五		
冬	の	曲	一四一	
さ	ざ	ん	花	一五五
か	け	す	一六一	
夏	と	冬	一六九	
地	獄	一七三		
北	の	海	から	一八二
た	ま	ゆ	ら	一九七
少	年	二二七		

名

人

名

人

第二十一世本因坊秀哉名人は、昭和十五年一月十八日朝、熱海のうろこ屋旅館で死んだ。數へ年六十七であつた。

この一月十八日の命日は、熱海では覚えやすい。「金色夜叉」の熱海海岸の場、貫一のあのせりふの「今月今夜の月」の日を記念して、一月十七日を熱海では紅葉祭といふ。秀哉名人の命日は、その紅葉祭の翌日にあたる。

紅葉祭には、例年、文學的な行事があるが、名人の死んだ昭和十五年の紅葉祭は、最も盛大に催された。尾崎紅葉のほか、熱海に縁の深かつた高山樗牛と坪内逍遙も加へて、三人の物故文人を慰靈し、また前年度の作品に熱海を紹介した、竹田敏彦、大佛次郎、林房雄の三人の小説家に、市の感謝状が贈られた。私も熱海に滞在してゐたので、この祭に出席した。

十七日の夜、市長の招宴は、私の宿の聚樂にあつた。そして、十八日の明け方、名人が死んだといふ電話で、私は起されたのだつた。私は直ぐうろこ屋に行つて名人を拜み、いつたん宿へ歸つて朝飯をすませてから、紅葉祭に来てゐる作家や市の世話人とともに、逍遙の墓に參つて花を供へ、梅園へまはつたが、その撫松庵での宴會半ばから、またうろこ屋に行つ

て、名人の死顔の寫眞をうつし、やがて遺骸が東京に歸るのを見送つた。

名人は熱海へ一月の十五日に来て、十八日に死んだ。まるで死にに來たかのやうであつた。私は十六日に名人を宿へたづねて將棋を二局指した。そして夕方、私が歸ると間もなく、名人は急に悪くなつた。名人の好きな將棋も、私と指したのが最後であつた。私は秀哉名人の最後の勝負碁（引退碁）の觀戰記を書き、名人の最後の將棋の相手をし、名人の最後の顔（死顔）の寫眞をうつしたわけであつた。

名人と私との縁は、東京日日（毎日）新聞社が引退碁の觀戰記者に、私を選んでくれたことから始まる。新聞社の催しの碁としても、この碁は空前絶後に大がかりであつた。六月二十六日に芝公園の紅葉館で打ち始め、伊東の暖香園で打ち終つたのは十二月四日であつた。一局の碁にはほぼ半年を費した。十四回も打ち繼いだ。私は新聞に觀戰記を六十四回にわたつて連載した。もつとも、局半ばで名人が病ひで倒れたために、八月の中ごろから十一月の中ごろまで、三月は休んだ。しかし名人の重い病ひのために、この碁はなほ悲痛なものとなつた。そしてやはりこの碁が名人の命取りとなつたのだらう。この碁の後、名人はもとの體にもどれないで、一年ほど後に死んだのであつた。

二

人
名
この名人の引退碁の終つた時間を正確に言ふと、昭和十三年十二月四日午後二時四十二分であつた。黒の二百三十七が手止りであつた。

そして、名人が無言のまま駄目を一つつめた瞬間に、

「五目でございませうか。」と、立ち合ひの小野田六段が言った。つつしみ深い聲であつた。名人の五目負けと分つてゐるものを、ここで作つてみる、その勞を省かうとした、名人への思ひやりであらう。

「ええ、五目……。」と、名人はつぶやいて、はればつたい臉を上げると、もう石をならべてみようとはしなかつた。

對局室につめかけてゐる世話役の誰一人として、ものが言へない。その重い空氣をやはらげるやうに、名人が靜かに言つた。

「私が入院しなければ、八月中に、箱根ですんでゐた。」

そして、自分の消費時間をたづねた。

「白は十九時間と五十七分、……後三分で、ちやうど半分です。」と、記録係りの少年棋士が答へた。

「黒は三十四時間と十九分……。」

碁の持ち時間は、高段者でたいてい十時間見當であるのに、この碁に限つて、四十時間といふ、約四倍に延長されたのだつた。それにしても、黒の三十四時間は、大層な消費時間であつた。碁に時間制が出来てからでは、空前絶後であらう。

終つたのがちやうど三時近くなので、宿の女中がおやつを持って來た。人々はやはり黙つたまま、盤面に目をやつてゐた。

「どうですか、お汁粉？」と、名人が相手の大竹七段に言った。

若い七段は打ち終へた時に、

「先生、ありがたうございました。」と、名人に禮をしたまま、深くうなだれてゐて、身動きもしないのだつた。兩手をきちんと膝にそろへて、白い顔は青ざめてゐた。

名人が盤上の石を崩すのに誘はれて、七段も黒石を碁笥ごけに入れた。名人は對局者の感想らしいものはひとことも言はないで、いつもと同じやうになにげなく立つて行つた。無論七段も感想はもらさなかつた。七段が負けたのであつたら、なにか言つただらう。

私も自分の部屋にもどつて、ふと外を見ると、大竹七段が、まつたくあつといふ間の早業で、どてらに着替へて、庭に出て、向うのベンチにひとり腰かけてゐた。固く腕組みしてゐた。青い顔を伏せてゐた。冬曇りの夕近く、さむざむと廣い庭で、思ひに沈んでゐる姿だつた。

私が縁側のガラス戸をあけて、

「大竹さん、大竹さん。」と呼んでも、怒つたやうにちらつと振り向くだけだつた。涙が出てゐるのだらう。

私は目をそらせて、奥にひっこむと、名人の夫人があいさつに來た。

「長いあひだ、いろいろお世話になりました……。」

私が夫人と二言三言話してゐる間に、大竹七段の姿は庭から消えた。そしてまた早業で、紋服に威儀を正すと、夫婦づれで、名人の部屋や世話人たちの部屋へ、あいさつに廻つた。

私の部屋にも来た。

私も名人の部屋へあいさつに行つた。

三

半年がかりの碁も勝負がつくと、その次の日には、世話人たちもみなあわただしく歸つて行つた。ちやうど伊東線の試運転の前日だつた。

年末年始の温泉の書き入れ時をひかへて、電車が開通する伊東の町は、大通りに祝賀の飾りつけをして、景氣づいてゐた。いはゆる「罐詰め」にされた棋士とともに、私も宿屋に籠つてゐたので、歸りのバスに乗る時、この町の飾りが目につくと、洞窟を出たやうな解放を感じた。新しい驛のあたりには、土の色のなまな道路がひらけたり、急ごしらへの家屋が建ちかかつたりしてゐる、その新開地の亂雑さも、私には世間の活氣と見えた。

バスが伊東の町を出てから、海岸の道で、柴を背負つた女たちに出會つたが、手に裏白うらどろを保持つてゐた。柴に裏白を結びつけてゐる女もあつた。私は急に人なつかしくなつた。山を越えて来て、人里の煙を見た時のやうだつた。言はば正月を迎へる支度などの、尋常な暮ししのしきたりがなつかしいのだつた。私は異常な世界からのがれて来たやうだつた。女たちは薪を拾つて、夕飯に歸るのだらう。海は日のありどころが分らぬやうな鈍い光りで、急に暗くなつて来さうな冬の色だつた。

しかし、そのバスのなかでも、私はやはり名人を思ひ浮べてゐた。老名人の感じが身にし

みてゐるので、人なつかしさも感じたりするのかもしれない。

碁の世話人たちも一人残らず引きあげて行つた後、老名人夫妻だけが伊東の宿に取り残されてゐるのだ。

「不敗の名人」が、一生の最後の勝負碁に負けたのだから、その對局場に一番ゐたくないのは名人のはずだし、病氣を押して戦つた疲れを休めるにしても、それならなほ早く場所を變へたらよささうなものだが、さういふことに名人はぼんやりと無神経なのだらうか。世話人や觀戰の私までが、ここにはもうゐたたまれなくて、逃げ出すやうに歸つて行つたのに、負けた名人だけが取り残される、その鬱陶しさ、味氣なさなどは、人の想像するにまかせて、自分では分らぬやうな顔で、名人はいつもと變りなく、ぼそつと坐つてゐるのだらうか。

相手の大竹七段はいち早く歸つて行つた。子供もない名人とちがつて、この人には賑かな家庭があつた。

家族が總勢十六人になつたといふ手紙を、大竹七段の夫人から私がもらつたのは、この碁の二三年後だつたと思ふ。十六人といふ大家族にも、七段の性格、もしくは生活の流儀が感じられて、私は訪問してみたくなつた。その後、七段の父が死んで、十六人が十五人になつたのを、私はくやみに行つたことがあつた。くやみと言つても、葬式から一月も後だつたらう。私は初めての訪問だつたし、七段は留守だつたが、夫人がなつかしさうにしてくれるので、應接間に通つた。夫人はあいさつをすませると、扉のところまで立つて行つて、

名 人
「さあ、みんな呼んでらつしやい。」と、誰かに言つた。ばたばた足音がして、少年が四五人

應接間へはいつて来た。子供の氣をつけのやうな姿勢で、一列にならんだ。みな内弟子らしく、十一二から二十くらゐまでの少年だったが、なかに一人、頬の赤い、まるまると大柄の少女もまざつてゐた。

夫人は私を紹介して、

「先生に、ごあいさつなさい。」と言つた。弟子たちはびよこんとおじぎをした。私は温かい家を感じた。わざとらしさはなく、かういふことが自然に行はれる家だつた。少年たちはすぐ應接間を出てゆくと、廣い家を飛びまはつて騒ぐ音が私に聞えた。私は夫人にすすめられるままに二階へあがつて、内弟子に一局稽古をしてもらつた。夫人が食べものを次ぎ次ぎに出してくれて、私は長居になつた。

家族十六人といふのは、この内弟子たちも含めてのことだつた。内弟子を四五人も抱へてゐるのは、若い棋士ではこの人のほかになかつた。それだけの人氣と収入とがあるわけだが、また大竹七段の子煩惱で家族思ひの性質が、そこまでひろがつてゐるのであらう。

名人の引退碁の相手として、宿屋に籠詰めされてゐたあひだも、對局のあつた日は、夕方打ち掛けになつて自分の部屋へ引き取ると、いつも早速夫人に電話をかけた。

「今日は、先生にお願いしましてね、(何)手まで進みました。」

それだけの報告で、碁の形勢を匂はずやうな不謹慎のあらうはずはなかつたが、この電話の聲が七段の部屋から聞えて來ると、私は好意を持たずにはゐられなかつた。

四

芝紅葉館の打ち始め式では、黒が一手打ち白が一手打つただけ、次の日も十二手までしか進まなかつた。そして對局場が箱根へ移ることになつて、名人、大竹七段、それに世話人たちが連れ立つて、堂ヶ島の對星館に着いた日は、碁もまだこれからだし、對局者のあひだの縫れもなくて、名人も一本足らずの晩酌に心なごんで、仕方話をするほどだつた。

一先づ通された廣間の大机が、津輕塗りらしいところから、塗り物の話が出て、名人は言つた。

「いつだつたか、漆の碁盤を見たことがありますよ。漆を塗つたのぢやない、心からすつかり漆で固めたので、青森の塗物師が道樂に作つたといふことでしたが、二十五年かかつた。乾くのを待つて、またその上に塗つてゆくのだから、それくらゐかかるんでせうな。碁笥やその箱も漆です。それを博覽會に出して、五千圓の札をつけたが、賣れなかつたから、三千圓で世話してくれといふので、日本棋院へ持ちこんで來たが、どうもね。なんしろ重い。私より重い。十三貫もある。」

そして、大竹七段を見ながら、

「大竹さんはまた太りましたね。」

「十六貫……。」

「ほう？ 私のちやうど倍だ。年は私の半分に足りないけれど……。」

「三十になりました、先生。いやですね、三十……。先生のお宅へ勉強に通つてゐた時分は、瘦せてをりましたね。」と、大竹七段は少年のころを思ひ出して、

「先生のお宅に御厄介になつてた時、病氣をして、奥さまにえらいお世話になりました。」

そして、七段の夫人の里の信州の温泉場の話から、家庭の話が出た。大竹七段は五段當時、二十三で結婚した。三人の子供がある。内弟子が三人ゐて、十人の家族だ。

六歳の長女が見様見真似で碁をおぼえたと言つて、

「このあひだ、聖目で打つてみました、その棋譜を取つてあります。」

「ほう、聖目で？ それはえらい。」と、名人も言つた。

「二番目の四つの子も、當りは分るんですね。天分があるかどうか、まだ分りませんが、もし伸びるやうでしたら……。」

そこに居合はせた人たちも、返事に迷つてゐるやうだつた。

棋界の第一人者の七段が、六つや四つの女兒を相手に打つて、幼いわが子に天分があれば、自分と同じ棋士にしたいと、眞剣に考へてゐるらしい。碁の天分は十歳ごろに現はれ、そのころから勉強しないと、ものにならないと言はれてゐるにしても、私には大竹七段の話が異様に聞えた。碁に憑かれてゐて、まだ碁に疲れてゐない、三十歳の若さであらうか。家庭も幸福なのにながひないと思へた。

この時、名人は、今の世田ヶ谷の家は二百六十坪の地所に建坪が八十坪で、庭が割に狭いから、そこを賣つて、もう少し庭の廣いところへ移りたいといふ話をした。家族の話をしよ